

ロールシャッハ法からみた対人恐怖傾向者の情緒と対人関係様式

——名大式技法の感情カテゴリー・思考言語カテゴリーに着目して——

21013FRM 齋藤 雅之

キーワード：対人恐怖心性，ロールシャッハ法，対人関係様式

I. 問題と目的

日本文化において体験することが多いとされている問題として、対人恐怖がある。対人恐怖とは、「他者と同席する場面で、不当に強い不安と精神的緊張が生じ、そのために他人に軽蔑されるのではないか、他人に不快な感じを与えるのではないか、いやがられるのではないかと案じ、対人関係から出来るだけ身を退こうとする神経症の一型(笠原, 1972)」とされている。

笠原(1972)によると、対人恐怖は思春期において一時的に見られるものから、前統合失調症ないし統合失調症の回復期の症状としてみられるものまで水準も様々であるとしているが、中でも一般青年にも広く見られる対人恐怖的な心理傾向は、対人恐怖心性と呼ばれている。堀井(2014)は対人恐怖心性が大学生の不登校傾向に直接的、間接的に影響を与えていることを示唆しており、不適応を生じさせる要因となりうる対人恐怖心性について検討する必要があるといえる。

馬場(1995)はロールシャッハの過程を、見られない奇妙な形によって引き起こされる不快感を処理し、妥当な判断を形成していく過程であると述べているが、これは対人恐怖症者が苦手とする曖昧な状況を擬似的に体験させることとなり、対人恐怖心性の検討に有効だと考えられる。

本研究ではロールシャッハ法のスコアリング法の1つである名大式技法において、形式分析だけでなく感情カテゴリーと思考言語カテゴリーも用いて、対人恐怖心性のより詳細な特徴を捉えることを目的とする。

仮説としては、対人関係意識に関連していると思われるHとMのスコアが高く、体験型が内向型であると予想される。また、感情カテゴリーにおいては不安反応、中でもAdef,Aobsが高いと思われ、攻撃性を抑圧していると考えられることか

らHhも高いと思われる。思考言語カテゴリーにおいては、Defensive AttitudeとFabulization Response中でもquestion sentence, apology(self), definitenessなどが多く出ると考えられる。

II. 方法

1. 質問紙調査

1) 調査対象者と実施方法

A 大学の学生 225 名を対象に、大学で行われた講義において質問紙を配布し、講義内あるいは講義から1週間後に回収した。

2) 質問紙の構成

以下の5つで構成された。①表紙：研究者の情報、事前説明文、調査協力への同意。②対人恐怖心性尺度II(堀井, 2016)：5因子25項目。③フェイスシート：学年、年齢、性別、④ロールシャッハ法実施の依頼書：名前、実施可能日時、連絡先。

2. ロールシャッハ法

1) 調査対象者と実施方法

質問紙調査でロールシャッハ法の実施を承諾した24名を対象とし、個別に面接室で実施した。

III. 結果

1. 尺度構成

堀井(2016)の想定した5因子で因子分析したところ、項目数が少ない因子が出現したため、固有値の減衰状況から2因子解を採用した。項目の内容と堀井(2016)の因子名を参考に、第1因子を「加害・孤立懸念」、第2因子を「劣等・被害懸念」と命名した。

2. スコアの比較

ロールシャッハ法のスコアと対人恐怖心性の各下位因子の合計得点の間に相関があるか分析した(表1)。形式分析のスコアにおいてはH,M,M:ΣCいずれにおいても差が示されず、仮

説は支持されなかった。スコアに差が見られたのは「A%」のみであり、「劣等・被害懸念」($r=.42, p < .05$)との間に弱い負の相関が見られた。

感情カテゴリーにおけるスコアに関しては、有意に差があるスコアが見られなかったため仮説は支持されなかった。思考言語カテゴリーに関しては、Fabulizationが「加害・孤立懸念」との間に弱い正の相関が見られた($r=.46, p < .05$)ものの、31.definiteness、34.overdefiniteness、35.overelaborationのそれぞれのスコアに関して差は見られず、仮説は一部支持されたといえる。

表1 各下位因子とスコア間の相関

	加害・孤立懸念	劣等・被害懸念	平均値(SD)
R	.23	.08	36.7 (19.7)
T/IR (秒)	.15	.23	10.9 (5.5)
T/ch - T/ach (秒)	.08	.24	2.4 (4.4)
Total Time (秒)	.30	.23	938.5 (524.2)
VIII X/R (%)	-.08	-.11	31.8 (7.7)
F%	.07	.23	39.5 (11.6)
F+%	.01	.07	71.7 (17.6)
newF+%	.12	.02	71.8 (13.1)
R+%	.13	.02	70.4 (13.4)
W:M (Wの%)	-.22	.26	77.1 (20.0)
M:FM (Mの%)	.16	.11	38.5 (23.9)
M:ΣC (Mの%)	.10	-.08	42.5 (28.2)
FC:CF+C (FCの%)	.03	-.21	74.1 (26.4)
P	.10	-.13	3.3 (1.9)
A%	-.22	-.48*	42.2 (12.9)
H%	.06	.04	22.1 (11.3)
M%	.16	-.13	4.0 (4.1)
H+A/Hd+Ad (H+Aの%)	.03	.08	79.7 (13.3)
<感情カテゴリー>			
Anxiety(%)	-.33	-.23	32.3 (13.6)
Adef	-.17	.15	1.0 (1.0)
Aobs	-.17	-.16	0.8 (1.2)
Hh	-.01	.31	2.8 (2.6)
<思考言語カテゴリー>			
Defensive Attitude	.07	-.01	6.3 (4.9)
14.question sentence	.03	.15	2.2 (2.5)
16.apology (self-critic)	-.01	.02	1.4 (1.8)
Fabulization	.46*	.05	14.2 (10.2)
31.definiteness	.35	-.14	8.8 (6.6)
34.overdefiniteness	.29	.13	1.6 (2.0)
35.overelaboration	.34	.09	0.8 (1.3)

3.事例研究

対人恐怖心性の高さによる特徴の違いについてより詳細に明らかにするため、質的な観点からも検討した。対人恐怖心性が高い者と低い者を2名ずつ選出して形式分析を行い、対人恐怖心性との関連についても分析した。

IV. 考察

1.スコアの比較による分析

対人恐怖心性の下位尺度として「加害・孤立懸念」と「劣等・被害懸念」の2つの因子が抽出され、「加害・孤立懸念」が高いほどFabulizationが

高く、「劣等・被害懸念」が高い程A%が低かった。そのため、作話性が強く想像力が豊かであるほど「他人に迷惑をかけていないだろうか」ということにまで考えが及び、常識的な思考にとらわれない傾向があるほど他者に対するネガティブな想像も生じて劣等感や被害感も感じることから、対人恐怖心性が高くなると考えられる。

2.事例の質的検討による分析

対人恐怖心性の高い2事例を比較したところ、その不安に対する防衛の様相は様々であったといえる。事例Gさんに関しては情緒的刺激を統制しきれないでいるために直接的に視線恐怖のような特徴を持つ反応を産出するが、事例Tさんのように刺激に対して逃避的な対応をすることによって、形式分析のスコアとして直接的に出てこない場合もあると示された。西園(1983)は、今日の対人恐怖症者のほとんどが「恐怖」を引き起こす状況からの逃避、回避、引きこもりの態度をとっていることを指摘しており、Tさんは健常者であるが、刺激に直接向き合うことを回避しようとする傾向は、対人恐怖心性の高い者の特徴でもあると考えられる。

対人恐怖心性の低い2事例に関しては、他者に対し恐怖や不安以外の感情を抱く傾向があるといえる。事例Pさんに関しては情緒性を強く統制することによって不安を感じないようにしており、事例Oさんは対人関係を良いものとして捉えようとしているところが、対人恐怖心性の低さの表れであると考えられた。

3.今後の課題

ほとんどのスコアにおいて相関が見られなかったことについては、ロールシャッハ法の対象者が24人であり、統計的には数が少なかつたことも影響していると考えられる。また、今回調査対象者となったのは、現状大学に通うことができている大学生であった。不安を抱かせる刺激を回避するといった防衛でうまく対処できていると思われ、その点でスコアに明確な差が見られなかった可能性があるため、実際に対人恐怖症を発症している患者と合わせて比較、検討する必要があるといえる。